

■作家について

1965年ソウル生まれ。梨花女子大学化学科卒業。卒業後は公務員になり、20代半ばからタイピングの練習をきっかけに小説を書きはじめ、1993年「小説と思想」の新人作家作品公募に「친구백팔십팔년의 어두운 방」を応募してデビュー。2001年ドイツ留学、1年後に退職して専業作家になる。2003年、韓国日報文学賞、2004年、東西文学賞を受賞。年に3～4ヶ月ベルリンに滞在し、韓国とドイツを行き来しながら執筆活動を続ける。近年はドイツの翻訳書を数多く手がける。小説とエッセイの境目を行き来するスタイルが特徴。

・短編集 6冊

「푸른 사과가 있는 국토」1995、「바람인형」1996、「심야통신」1998、「그 사람의 첫사랑」1999、「홀」2006、「올빼미의 없음」2010

・長編 13冊

「랩소디 인 블루」1995、「부주의한 사랑」1996、「나는 이제 니가 지켜줘」2000
「붉은 손 클럽」2000、「이바나」2002、「동물원 키티」2002、「일요일 스키야키 식당」2003、한국일보문학상、「에세이스트의 책상」2003、「독학자」2004 동서문학상
「당나귀들」2005、「북쪽거실」2009、「서울의 낮은 언덕들」2011、「알려지지 않은 밤과 하루」2013

・他に、散文集 3冊（2000、2014、2015）、翻訳書 20冊以上

■本作品について

・短編集『올빼미의 없음』に収録。2009年『창작과비평』秋号で発表された作品。

・人物と物語中心の伝統的な小説から離れて、叙述自体がどうやって物語をつくっていくかを見せ、2010年李箱文学賞優秀賞受賞。

・「올빼미의 없음」の連作にあたる。「올빼미의 없음」は作家の文学的師匠といえる70代ドイツ人評論家の死が受け止められなかった経験から生まれた作品。作家本人も実名で登場。本作は「올빼미의 없음」脱稿後の強い余韻から半月ほどで書きあげた。ドイツが舞台でエッセイ的要素が強い。

・ムズーン塔とは、フランクフルトにある Künstlerhaus Mousonturm (アーティストハウス・ムズーン塔 <http://www.mousonturm.de/web/en/>) のこと。*Mouzon (ムーゾン)

■登場人物

・私…おそらく作家本人。

・模型飛行機コレクター…私とムズーン塔に向かう。ホルバイン通りの家主を私に紹介。

・タクシー運転手…言葉があまり通じない黒人系の外国人労働者。

・作家のムゾーン…「道化師たち-初心者のための小規模道化師学」という本を書いた。255人のクアンデを百科事典のように集めたもので千ページを超える。赤い靴下を履き、縮れ毛のロングヘア、くたびれた格好でゆらゆらとした身振りと口調で有名。

・塔を建てたムゾーン… (Johann August Mouson) フランスのユグノー戦争 (1562～1598、フランスのカトリックとプロテスタントの内戦) での迫害を逃れるためドイツに移住した一族の子孫。18世紀末に石鹸職人としてこの都市に石鹸と化粧品の工場をつくった。ムゾーン社の代表作は第一次世界大戦直後に発売の「ムゾーン (強力効果) クリーム」。1972年に会社は売却され塔だけが残る。塔ではさまざまなインディペンデント系アーティストのイベントが行われる。

・ホルバイン通りの貸し部屋の大家夫婦…夫はリタイヤした元エンジニア。

■内容

前半 (P156～169)

私は模型飛行機コレクターと一緒にタクシーに乗り、彼の友人ムゾーンの作品朗読会の会場のムゾーン塔に向かうが、外国人の運転手は言葉が聞き取れず、ムゾーン塔も知らないため、周辺を1時間もぐるぐる回っている。コレクターは文句を言い、運転手は料金メーターを止めて探すが、すでに間に合っていない。

ムゾーン塔はわずか1ブロック先の角を曲がったところにあり、ようやくたどり着く。これからおそらく塔の隣の建物のイタリアンレストランに入り、二人で黙ったままパスタを食べるだろうが、まだ何もはじまっていない。ムゾーン塔はがっかりするくらい平凡な、ただの四角のレンガのかたまりのように見えた。

運転手に怒っていたコレクターはふと歩みを止めて、私が誰なのか探るように見つめた。コレクターはじつはパイロット席にいて、墜落した飛行機に乗る悲しいパイロットで、私は土から彼の背骨を掘り出して宙に掲げるだろうことを、なぜか知っている。嬉しさと悲しみに軽く飛び跳ねる私に、彼は何かを言おうとするが、私は靴に入ったぬれた砂を払っている。

後半 (P169～最後)

時が経ち、私はウェブマガジンでベルンの模型飛行機の展示会の写真を見ることになる。世の中にはさまざまなコレクターがいて、彼らの夢は個人博物館を開くことで、実際に多く存在することも知る。

私はあちこち部屋を借りて滞在しながら旅していた時期があったが、その部屋や貸し手に収集癖を感じたことはなかった。2、3ヵ月だけ部屋を借りるのは難しく、知人の部屋を渡り歩くこともあったが、冬の香港での高級ホテルでの1週間、夏のボーデン湖の別荘での10日間のように、夢の中で夢を見ているような滞在もあった。自分に運命というものがあるなら、そこは運命ですら予想できなかつたであろう、例外の島だったと友人に説明

したこともある。

私の旅は、見知らぬ人と暮らす部屋を転々とする旅であり、「書くことができる新しい貸し部屋」と同義語だった。ドイツの文学団体が提供するヴィラに運よく滞在できた年もあったが、たどり着くまでに夢幻の感覚に襲われ、それがすでに見た光景なのか、今後、見たと感じる映像なのかわからなくなった。

昨年秋ブックフェアで1週間滞在したときは、フランクフルトのホルバイン通りで部屋を借りた。そのの大家夫妻に週末庭園に招待され、妻から書斎の整理中に兄の手紙の束が出てきた話を聞いた。その手紙を読んで呼び起こされた懐かしさと痛みは、生涯の最後に大切にしたい幸せだろうと思ったという。兄の最後の誕生日で1通を読み、その幸福感を伝えられてよかったという話だった。

駅に向かう車中で、私は大家夫妻の妻に昨夜の夢のことを話した。模型飛行機コレクターとマイン川の両岸に別れて散歩する夢だった。それが彼であることはわかっていたが、彼は形もなくそこにいた。あなたと一緒にいる場所はいつも変だと彼に言うが、口に出して言わなかったのは、これもすべて夢の中の影で、この瞬間の痛みや不自由も、実際の私たちを決して邪魔することがないと信じていたからだった。そう説明するあいだも、薬局でまだムゾーンのクリームが売られていたのを見つけたがそんな話はあの日聞かなかったと思い出し、まるで歴史博物館の50年代の部屋につれてこられたようだったと、彼に話したかったと思う。

私は模型飛行機コレクターとタクシーに乗っているが、すでに深く眠った顔で声もなく話す彼の言葉は、彼の夢の世界から私の夢の内部に向かって響くようで、「まるで鳥のように」という語彙のように聴こえた。

■感想など

- ・~게 될 것이고, 하게 되겠지만, 게 될 텐데など、まだ起こっていないこととして、過去から未来を見るような表現が突然出てくる。現在、過去、未来の時制が混在している。
- ・後半、作家が実際に部屋を借りて暮らしたときの回想らしきエピソードがこまかに出てくるが、それ以外は夢なのか現実なのか、よくわからない不思議な小説。
- ・非常に長い一文、複文、重文がたびたび出てくる。
- ・「울썩미의 없음」と合わせて読むと、コレクターは「울썩미~」に登場するイェルク（作家の文学的師匠だったドイツ人評論家）とも読みとれる。
- …舞台がどこなのかわかりづらかった。
- …一文がとにかく長い。単語は簡単だが、内容が抜けていって頭に残らなかった。
- …タクシーで迷う話が長すぎ、前半後半で違う話に感じたが、最後で少しつながった。
- …後半は旅のエッセイのようだった。
- …兄の手紙のくだけは唯一心が温まったが、逆に陳腐でもあるかも。
- …以前よく見かけた海外小説のスタイル、多和田葉子の作品と似ている。